

「開催」の基本語化

——類義語「挙行」との比較——

趙 愛 華

論文要旨

本稿は近代以降に出現した「開催」を中心に、辞書の記述による意味の変化と、コーパスから収集したデータに基づき、その「基本語化」の過程を考察するものである。また、「開催」の類義語「挙行」を例に、両者の相違点などを比較し、なぜ「開催」が「基本語化」していくか、「挙行」が「周辺語化」していくかの要因を分析する。まず辞書類と資料類によると、「開催」の先行研究がほとんどないことがわかる。初出例は『太陽コーパス』の1901年であり、『日本国語大辞典第二版』の1905-06年より早い。開催は「開催」はサ変動詞用法の使用が名詞用法の使用に比べて多い特徴がある。また、国家政府などが開かれた「政策性会議」及び「国際会議」が他の分類と比べて使用数が大きく上回っている。最後に、その類義語「挙行」との対照で、意味用法、内容、文体などによる違いを明らかにする。

[キーワード：①「開催」 ②近代漢語 ③基本語化 ④漢語サ変動詞 ⑤「挙行」]

1. はじめに

幕末明治初期に、西洋文化の受容のため、多数の「新漢語」が作られてきた。このような「新漢語」は出現数が非常に多かった語彙から次第に淘汰されていく現象が（池上（1984）、今野（2014）など）ある。この時代に漢語がどれだけあり、どのような語が淘汰され、どのような語が基本語化したか、また、定着したかということになると、資料が多様であることもあって、従来の研究では明らかにされてこなかった。本研究は明治以降に出現した「開催」「開業」「開化」「未開」などのような「開」が語基となる語彙のうち、比較的近代化傾向のある語彙を取り上げ、また「基本語化」したと考えられる「開催」を例に「基本語化」の過程及びその類義語との相違点を明らかにする。

2. 先行研究

「基本語化」の研究について、田中牧郎、金愛蘭などが研究を行っているが、金は主

に外来語の「基本語化」に注意を向けている。田中（2013、2015a）は、「努力」「実現」「拡大」「援助」などのような個別の語を取り上げて、その用例を分析している。

語彙を星雲に喩える見方をした樺島忠夫（『日本語はどう変わるか——語彙と文字』岩波新書、1981年）は、「語彙は中心部にぎゅっと重なり、周辺部に行くともばらになる。中心部にある語は頻度も高く、時代を通じて不動な語、周辺部にある語は、生まれては消えていく流動的な語と見立てる。その中心から周辺へという段階を同心円に区画してみると、中心に近い重要な位置を占める語から、外側に進むにつれて拡散しやすい周辺的な語になっていくさまを段階的に捉える。」と語彙を捉えている。田中牧郎（『近代書き言葉はこうしてできた』岩波書店、2013）は、そのような周辺の段階を「周辺レベル」、そこに属する語彙や語を「周辺語彙」「周辺語」といい、中心の段階とそこに属するものを「基本レベル」「基本語彙」「基本語」と呼んだ。そして、周辺の語であったものが中心に近い重要な位置を占める語へと、語彙における位置を移行させていく現象を「基本語化」と考えている。

「基本語化」語彙の特徴として、田中氏は①既存の和語の類義語との間に緊密な語彙体系を形成すること、②連動して別の類義語も基本語化する場合があること、の2点を指摘してきたが、それが、漢語が基本語化する場合の一般的原理とみてよいかどうか、またすべての語彙に適するかは、さらに多くの語によって検討する必要があると思われる。

3. 研究方法

本稿における「開催」の抽出にあたっては、国立国語研究所（2004）『分類語彙表増補改訂版』から、【抽象的關係】及び【人間活動—精神および行為】に属する語彙を取り上げ、『日本語国語大辞典』（第二版）で近代以降（1868年～1945年）に出現した漢語を対象とし、「開催」を抽出した。資料として、オンライン検索ツール「中納言」の中の、国立国語研究所が開発した『日本語歴史コーパス』（略称CHJ）を用いて、調査を進める。【キー】を未指定にし、【語彙素】に「開催」という指示で検索し、140件の検索結果を得た。語彙の通時の変化を見るため、今回は主に、近代雑誌データベース『太陽コーパス』『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』の三件に限定し、すべての用例を抽出することにする。

4. 辞書による意味変化の確認

コーパスによる分析をする前に、まずは、「開催」が既存の辞書類でどのように記載されているか、また、その意味がどのように変化していくかを確認しながら考察していきたい。下記の表は各辞書及び語彙研究文献による「開催」の記載有無についてまとめたものである。

表1 辞書と語彙研究文献での見出しの有無

	辞書と語彙研究文献	(記載の有無を○×で示す)
辞	『日本国語大辞典第二版』	○
	『岩波古語辞典第六版』	×
書	『小学校古語大辞典』	×
	『角川古語大辞典』	×
類	『古典基礎語辞典』	×
	『明治のことは辞典』	×
資	『大漢和辞典』	×
	『近代漢語研究文献目録』 李漢燮編	×
料	『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』 佐藤亨編	×
	『語彙研究文献語別目録』 佐藤喜代治編	×

表1によると、「開催」は『日本国語大辞典』のみに記載してあることが分かる。このことから、「開催」はほとんどまだ研究されていない語彙だと言えよう。また、以上の辞書と文献に載っていないことから、「開催」の出現時期は近代後期だと推測できる。まずは、『日本国語大辞典』を通して、「開催」の意味変化を確認していきたい。

『日本国語大辞典第二版』

「開催」〔名〕

集会、会議などを開くこと。展覧会、博覧会など催し物を行なうこと。

* 吾輩は猫である〔1905～06〕〈夏目漱石〉九「一大凱旋祝賀会を開催し」

* 或る女〔1919〕〈有島武郎〉後・三〇「来年聖（セント）ルイスに開催される大規模な博覧会の協議の為め」

* 公職選挙法〔1950〕一四一条「個人演説会（演説を含む）の開催中」

『日本国語大辞典第二版』の記載から、最初の用例は1905-06年の集会を開催することから、そして、1919年博覧会の開催、最後に1950年個人演説会の開催まで、開催の内容は三種類に分けられていることが分かる。

『大漢和辞典』には見出しがない。編集時点ではあまり定着していなかった漢語ということだろうか。また、このことから「開催」は中国からの借用語ではなく、日本自ら作り上げられた新漢語だと言えるであろうか、さらに検討が必要である。

5. 雑誌コーパスにおける「開催」の頻度の推移

雑誌コーパスにおける年次による「開催」の出現頻度の推移は、表2に示した通りである。

表2 「開催」の頻度（粗頻度）

	明六雑誌	国民之友	太陽					計
	1874-75年	1887-88年	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年	
名詞	0	0	0	1	12	23	14	50
サ変動詞	0	0	0	3	36	19	29	87
計	0	0	0	4	48	42	43	137

表2から次のことを読み取ることができる。

- (1) 「開催」の文学での初出は『太陽コーパス』1901年である。『日本国語大辞典第二版』の用例の1905-06年を遡ることができる。
- (2) サ変動詞から出現し大きく増加している。特に1901年から1909年の間に、サ変動詞は大幅に増加しつつある。しかし、1909年から1917年に減少傾向が顕著で、次の1917年～1925年の間にまた増加傾向を示し、傾向が不安定である。
- (3) 名詞用法は少し遅れて、1917年までの間で徐々に増加傾向を示すが、1925年まで出現数が再び下がる傾向を示し、これは、サ変動詞用法が増加しつつ、名詞用法に影響を与えたのであろうか。
- (4) サ変動詞より名詞用法の出現数の動きのほうが安定しているが、最後にはやはりサ変動詞の影響で少なくなっている。これらの傾向は、先行研究で今までに取り上げられた語彙「努力」「実現」「拡大」「援助」「期待」「緊張」に関する基本語化の研究に照らして、使用頻度の変化が少し不安定だが、全体から見れば、サ変動詞の使用傾向は名詞より上回っていることが表からもはっきりわかる。この点から、「開催」は今までの「基本語化」語彙と相似していることが考えられる。

6. 「開催」の意味変化と用法

表1によると、「開催」の初出例は1901年の4例である。具体的に用例を見てみる。

- ①昨年来同會の副理事長齋藤巳三郎氏等は當局者及び貴衆兩院の重立たる諸氏を訪問せしか、一月廿三日東京に於て同會の大會を開催し右未獨立九市の獨立に關し諸般重要の協議をなしたり。¹⁾ 『太陽』「海内彙報」1901年

②国民同盟会開會 一月十五日同會談話會開催、新歸朝者工學博士田邊朔郎氏の滿洲視察談あり 『太陽』「海内彙報」1901年

③徳久恒範本年二月三月中熊本縣の主催を以て開催せる第十一回九州沖繩八縣聯合共進會に於て福岡縣出品清酒二百四十餘點の審査を取消すに至り其結果紛擾を引起すに至らしめたるは畢竟同會事務長として措置宜きを得ざるに其因するものにして職務上不都合なりとす 『太陽』「海内彙報」1901年

④まづ第一に美術大家の翰林院を創立して嚴格醇正なる批評を以て美術の趨向を指導する所とし、第二に美術競技會を毎年一回開催することとし翰林院の美術大家を以て審査員とし全國の作家中より優物を抜きて之を買上げて國寶とし永く紀念美術館に陳列するのである。 『太陽』「美術奨励の一策」1901年

上記の4例が、『太陽コーパス』の初出例である。『開催』の出現が遅いため、これが、『開催』の初使用例と言える可能性が高い。これについてはさらに検討が必要であろう。そのうち、4例中3例が同じ出处で、「海内彙報」から取り上げられたものである。この3例のうち、2例が「国民同盟会開會」であり、もう一つは「第十一回九州沖繩八県連合共進会」であるが、「第十一回九州沖繩八県連合共進会」と「国民同盟会開會」とは同じ政府関係が開かれる会議であり、性質上相似する会議である。この3例を共に政府が開かれた政策関係の会議とまとめて良いと考えられる。4例中最後の用例は「美術競技会」であり、これを学術会の一種に帰納することができる。「開催」の初出例は、主に政府によって開かれた会議を中心に行っていることが窺える。

「開催」のすべての用例内容をまとめて表にしたものが表3である。

表3 「開催」の内容

	政策会議	国際会議	学術会	博覧会・ 展覧会	商業会議	祝賀会・ 忌会	談話会・ 招待会	演説会	計
1895年	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1901年	3	0	1	0	0	0	0	0	4
1909年	13	2	3	9	6	11	2	2	48
1917年	13	20	2	2	0	1	1	3	42
1925年	8	14	2	4	8	3	0	4	43
計	37	36	8	15	14	15	3	9	137

そのうち、用例⑤のような「政策会議」は主に政府が開催された会議のことで、日本本国のみならず、外国の政府が開かれた本国に対する政策会議なども含まれる。用例⑥「国際会議」は連合国、または、世界大局に関わる会議のことを指す。用例⑦「学会」は主に、教育上、芸術上、人に教えるような催し、または、競技会なども含まれる。用例⑧「博覧会・展覧会」は一般的な文化・学術・貿易・技芸などを集めて示し、広く一般に公開する催しのことを指す。用例⑨「商業会議」は主に商人の立場に立ち、商業に関わる会議を指す。用例⑩「祝賀会・忌会」は歓迎会、晩餐会、宴会、記念会なども含む。用例⑪「談話会・招待会」は主に、茶話会の形式で、意見・考えを交流する会を開くこと。最後の用例⑫「演説会」はある事を呼びかけ、アピールすること、かつ、示威運動も含まれる。具体的な用例は以下のようなものがある。

- ⑤ 先是、進歩黨兩派の乖離は到底救ふ可からざるの形勢を示し、非改革派は二十二日憲政本黨大會を神田錦輝館に開催したるが、出席者總數百六十餘名に達して二十三縣を代表し、出席せざるもの僅かに五縣に過ぎず、 『太陽』「彙報」*（作） 1909
- ⑥ 獨逸回答 獨逸政府は米國大統領の覺書に對し此際中立地に於て交戰國代表者の會議を直ちに開催せんことを提議したる回答を駐獨米國大使に交附し澳勃土同盟國も同様駐在の米國大使に交付すと。 『太陽』「日誌」*（作） 1917
- ⑦ 例せば昨年九月ダブリン大學に開催せる英國學術協會の大會に於て會頭フランシス、ダルウイン氏が「植物に於ける記憶及び習慣」と題し植物にも一種の靈魂あることを學術上の事實として講演したるが如き、 『太陽』「東西文明の融合」浮田和民（作） 1909
- ⑧ 尚ほヴェニスの萬國美術展覽會に就いて一言したいと思ひますが、此の美術展覽會は隔年ヴェニスに於て開催せらるるのであつて、近來伊太利に於て企だてられた事業の中で、最も成功したものの一つである。 『太陽』「名士の伊太利觀 活氣充實せる伊太利」牧野伸顯（作） 1909
- ⑨ 株式引受の確定を見るに至り、以て八月四日總株式一萬株に對する第一回拂込金一株に付金二十五圓の拂込を完了せるにより、即日各株主に創立總會開催の事を通知せり。 『太陽』「彙報」*（作） 1909
- ⑩ 憲法發布二十年の祝賀會を開催するに當つて、議院を其會場に充つるのは是非論が、大分はづんだそうであるが、つまらぬことが問題になるものだ。

『太陽』「大流小流」*（作）1909

⑪日本銀行倶楽部に於て、銀行業者を中心とし、澁澤男以下實業界の名士二十餘名の主催を以て、桂首相、平田内相以下實業界に直接關係ある官邊當局者諸氏の招待會開催し、去る四月二十日桂首相の發案に係る實業振興諮問案に對する答辯會を兼ね、最近實業界の趨勢并に今後の方針に就て、意見を交換したり。

『太陽』「彙報」*（作）1909

⑫新聞紙は筆を揃へて會社の横暴を痛撃し、引續き反對大演説會は代議士、辯護士、市區會議員新聞記者によりて開催され、一月に入りて認可許否の期日切迫するに及び、五團體聯合會は組職せられ、

『太陽』「彙報」*（作）1909

表3によると、全体から見れば、「政策會議」と「國際會議」が占める割合が最も多い。この中で、日本本国の「政策會議」は全部で19件あり、残りの18件がすべて外国内部の會議である。「國際會議」の36件を含めて、ほとんど開催するのは國際關係上の大事件、例えば、平和會議、各交戰國代表會議など。これは、その時の時代背景にもよるが、第二次世界大戰をきっかけに、自国の体制が乱れるとともに、外国の政治、政局などに目を向ける傾向があると考えられる。「政策會議」、「國際會議」に続いて、「博覽會・展覽會」と「祝賀會・忌會」の開催が多い。国の政策を中心とするのみならず、文化の伝播も重視する傾向があると窺える。しかし、以上の用例数はあくまでも述べ語数のことを指し、用例は同じ記事から引用したものも少なくない。しかしながら、全体的から見ると、国家、政府による「會議」と、国家間で開催される「大會議」は、大きい割合を占めることは間違いない。

「政策會議」と「國際會議」は全体的に割合が大きいのが、年代の推移に連れて、減る傾向がある。特に「國際會議」は1917年までは大幅に増加しつつあるが、1917年から1925年の間は下がる傾向を示す。その代り、「學術會」、「談話會」、「演説會」はあまり大きい変化が見られない。「政策會議」は1909年まで増加しつつあるが、1917年まであまり変化が見られない、そして1925年の間に減りつつある。「博覽會」と「祝賀會」も減りつつあり、全体的からいえば、「商業會議」が大きな変化ではないが、増加する傾向がある。今後の發展は主に「商業」に移行するのであろうか。

7. 「開催」の類義語との比較

「開催」と意味の近いものには「挙行」と「執行」、「主催」などがある。まずは、用例数を見てみる。

表4 「開催」及びその類義語の出現頻度（粗頻度）

	明六雑誌	国民之友	太陽					計
	1874-75年	1887-88年	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年	
開催	0	0	0	4	48	42	43	137
挙行	0	5	37	49	47	17	12	167
執行	0	40	70	62	57	41	52	322
主催	0	0	3	1	13	19	11	47
計	0	45	110	116	165	119	118	673

表4から、「開催」は『太陽コーパス』の五つの年次の語彙レベルが「基本語化」の方向へとレベルが変化していく。例えば、なし→e→a→b→b²⁾と変化している。今まであげた「基本語化」語彙とは少し異なる。1909年に使用頻度が大幅に増加しているが、全体的から見ると、「基本語化」に属すると考えられる。「開催」の漢語の類義語の「挙行」、「執行」と「主催」は、同じく『太陽コーパス』の五つの年次の語彙レベルに照らすと、レベルの変化が各々異なっている。「挙行」がb→a→a→c→cと推移する。これは、徐々に「周辺語化」に移っていく傾向を示している。「執行」はa→a→a→b→aと推移し、ずっと「基本語彙」として変わらない語と考えられる。また、「主催」はe→e→c→b→cとずっと「周辺語彙」として変わらない語と考えられる。そこで、「開催」と使用頻度が相似する「挙行」を例に、比較してみる。

7.1. 辞書の記述による意味用法の相違

『日本語国語大辞典』

「挙行」

事を行なうこと。式や行事などを公にとり行なうこと。

- * 新聞雑誌 - 九号・明治四年〔1871〕八月「速に採択挙行（キョコウ）の実あらんことを仰ぐ」
- * 大日本帝国憲法及び皇室典範制定の御告文 - 明治二二年〔1889〕二月一日「而して朕が身に速（およん）で、時と俱に挙行することを得るは」
- * 田舎教師〔1909〕〈田山花袋〉四一「旧の正月に羽生で挙行せられる成績品展覧会に」
- * 漢書 - 食貨志下「挙_レ行天下塩鉄」

『日本語国語大辞典』によると、「挙行」の初出例が1871年、はるかに「開催」の1901年より出現が早い。また、最後の用例が中国『漢書』からの引用であり、「挙行」が中国から由来した語彙と考えられるが、この点については、今後さらに検証する必要

がある。

意味用法から見ると、「挙行」は「事を行なうこと。式や行事などを公にとり行なうこと。」、「開催」は「集会、会議などを開くこと。展覧会、博覧会など催し物を行なうこと。」であり、両者の違いを「開催」を「開く」、「挙行」を「行う」と理解してもよかろう。「開く」の用例から見ると共通の特徴は「閉じられていた状態を変化させる」ところに焦点が当てられるが、転じて、「それまで実施されていなかったものを実施するようにする」という意味を持つようになる。一方、「行う」は「帝国議会開院式」「卒業式」など、ある一定の規則・順序に従い、実施されるものによく使われる。さらに、「展覧会」などに特にルールがないものに対しては、「行う」より「開く」の方がふさわしいであろう。

7.2. 雑誌コーパスによる「開催」と「挙行」の内容の比較

表 5a

「開催」 国民同盟会、美術競技/展覧会、反対大演説会、憲法発布祝賀会、追悼/記念会、常議員会、織物業者連合会、代議士総会、借地権保護会、万国著作権保護会、憲政本党大会、手形交換所連合会、横浜開港五十年祝、日韓瓦斯大株主会、国防会議、全英新聞記者大会、国際商業/教育会議、経済会議、国際議会、講演会、軍事会議、労働会議
--

表 5b

「挙行」 開校/院式・卒業/閉会式、議会、百年祭、司法事務会、条約国会議、婚儀葬式佛儀式、皇帝即位式、平安遷都記念祭、遷座式、全国取引所大会、褒賞授与式、帝国建設会、高等文官採用試験、全国有志連合競漕会、特別大演習、師団観兵式、鐵道起業式、台湾神社鎮座式、銅像除幕式、横浜開港祝賀会、政友会、選挙会

上記の表 5a. b の二つの表から、「開催」は国家から国民に至るまで、政治、商業、教育、芸術など極めて使用範囲の広い語彙であるが、「挙行」は特定の大会議、大行事に限られていることから、使用範囲には制限があることがわかる。ある場面で、「開催」は一般の会や会議を開く場合は「挙行」と置き換えることができると考えられる。

また、「展覧会」「博覧会」などに特にルールがないものに対しては「開催」が用いられるが、

⑬尚ほヴェニス[・]の萬國美術展覧會[・]に就いて一言したいと思ひますが、此の美術展覧會は隔年ヴェニスに於て開催せらるるのであつて、近來伊太利に於て企だてられた事業の中で、最も成功したものの一つである。

『太陽』「名士の伊太利觀 活氣充實せる伊太利」1909

展覧会の後に「褒賞授与式」または「～の典」が共起する場合は、「挙行」が用いられる。例えば次のような例である。

⑭美術館の受賞者第四回内國勸業博覽會は七月十日を以て褒賞授與の典を挙行せり、今その美術の部に屬せる妙技一等の受賞者姓名は左の如し 『太陽』「*」1895

⑮同九日（日）發明品博覽會褒賞授與式を挙行す 『太陽』「*」1895

さらに、上記の表の用例のように、「式」が付く場合は「挙行」と共起する場合が多い。例えば、「開院式」「即位式」「開業式」など。

そこで、単独に「式」の意味を見ると、『日本語国語大辞典』「ある物事をするについての定まった形式や方法、型、体裁。定まった法則。一定の標準。規則。式目。方式。のり。」の意味であり、「式」には決まったルールがあるため、「挙行」と共起すると考えられる。

一方、「開催」を見ると、「開催」と共起する語は「会」と考えられる。「会」は「a 催し事のために人々が集まること。また、その集まり。集会。会合。b 目的や好みを同じくしたものの集団。結社。c 相談、審議などのための集まり。会議、会盟など。」の意味であり、「開催」はある団体が集まって討論する場合に用いる。例えば、

⑯大學卒業年限短縮の聲は殆ど流行語の如く各所に起つて遂に教育調査會の開催を促したが、年限短縮の聲が大學制度制定以後三十年後の今日になって始めて起つて來たのは、 『太陽』「大學程度の工業教育」1917

上記に述べたように、「挙行」は「式」、「開催」は「会」と共起する場合が多い。また、「挙行」は中国由来の語彙の可能性がことから、限られた範囲、例えば大行事などの場合でしか使えないことで新時代の発展に対応できなくなり、そこで、使用範囲の幅が広くかつ一般の物事でも使われる「開催」がそれに応じて、近代に新たに作られた和製漢語の可能性が大きいと考えられる。そして、意味が共通する両語が置き換え可能であることにより、「開催」が「基本語化」し、「挙行」が「周辺語化」していくのであろうか。

「開催」と「挙行」の共起内容として、表6のようにまとめることができる。

この表6からみれば、「開催」が適用される状況は、主に「～会/会議」であり、「挙行」は多くが「～式」である。「～会」もあるが、「会」は「式」に比べて圧倒的に少ないことがわかる。また、「サロン/デー」などの外来語と共起するのは「開催」のみで、「挙行」はできない。これは、「挙行」より「開催」のほうがより新しい、新事物を受容しやすい特徴を持っているからであろう。一方、「挙行」は「方法/政策/計画」など、抽象的なものと共起することができるが、「開催」は適用できない。

表6 「太陽」における「開催」と「挙行」の内容の比較

共起内容	開催	挙行	計
～会	82	24	106
～式	0	82	82
～会議	42	1	43
～記念/～記念祝賀	2	1	3
～祭	3	11	14
～講義	1	0	1
～展	1	0	1
～宴	1	1	2
～サロン/～デー	2	0	2
～礼	0	1	1
～演習	0	13	13
～選挙	0	6	6
～典	0	8	8
～方法/政策/計画	0	3	3
～試験	0	4	4
その他	3	7	10
計	137	162	299

8. 「開催」及びその類義語「挙行」の文体の推移

表7中の「合計」を見ると、「開催」の「文語」と「口語」の使用頻度はあまり大きな相違がないと考えられるが、全体的な文体の推移から、「口語」用法が徐々に多くなり、逆に、「文語」用法が1909年から大幅に減っていくことがわかる。特に1917年から1925年の間で、差が大きい。「開催」は「文語」から「口語」に移行する傾向が見られる。これは、これまでの先行研究及び「緊張」と「活躍」の特徴と一致すると考えられる。用例数の多少にもよるが、1909年まで、大部分が「文語」であり、1917年から1925年の間で一気に下がり、「口語」が次第に多くなっていく。1909年と1925年の「文語」と「口語」の割合が逆転しているように見える。それとは逆に、「挙行」は「文語」用法と「口語」用法の使用頻度が大幅に違っていることが窺える。全体から見れば、「文語」用法が「口語」用法より大きく上回っていることがわかる。しかし、「文語」用法は1901年を境に、減っていく傾向がある。1909年からさらに大幅に減っていく。「口語」用法は徐々に増加していくが、これは、全体的な使用頻度が減少していくこととも関

表7 「開催」と「挙行」の文体

	開催			挙行		
	文語	口語	総計	文語	口語	総計
1887-88年	0	0	0	5	0	5
1895年	0	0	0	37	0	37
1901年	3	1	4	47	2	49
1909年	38	10	48	44	3	47
1917年	21	21	42	14	3	17
1925年	6	37	43	4	8	12
合計	68	69	137	151	16	167

わっていると考えられる。「挙行」は1917年から1925年の間で逆転しているが、全体的傾向には及ばないであろう。「挙行」は「文語」用法から「口語」用法に移行する傾向が見られないことから、「挙行」は比較的硬い文章用語であることが「周辺語化」になっていく原因の一つであろう。

9. おわりに

「開催」は「会議を開く」の意味で用いる場合が多く、一方、類義語の「挙行」は「行事を行う」傾向で用いられ、「開催」と「挙行」は意味用法的に相違があることが考えられる。「文体」から見ると、「開催」は専ら「口語」化していき、「挙行」は硬い「文語」用法に用いる傾向で、次第に周辺語化していくことが窺える。

「開催」は今まで取り上げられた「緊張」「活躍」と比べて、「基本語化」とは少し異なる点がある。それは、『太陽コーパス』の五つの年次の語彙レベルが「なし→e→a→b→b」と推移する点である。確かに大局的には少から多へと変化しているが、eからaの増加が短期間で大きい。田中氏が挙げられた「優秀」のe→e→b→a→aのような段階的レベル変化とは異なっている。しかし、全体的には「基本語化」の特徴を示している点で、また、近代のみならず現代でも多く使われている点でも、「開催」を「基本語化」語彙に分類する必要があると考える。これまでは、近代の雑誌コーパスで「基本語化」語彙に相当する漢語が取り上げられているが、今後は、近代のみならず、現代でも「基本語化」に相当する語彙について考察することが課題と考える。

【付記】 本稿は執筆者の学習院大学大学院2018年度修士論文「近現代日本語の漢語の基本語化に関する研究」（安部清哉教授ご指導）の一部によるものであり、また、大学院科目・日本語学演習（安部清哉教授）にてそのテーマと指導に沿って発表した内

容をもとにまとめ直したものである。

【注】

- 1) 例文の下線及び文字の上付け、下付けなどは筆者によるもので、以下も同様。
- 2) 「基本語化」のレベル分けは、田中氏の『太陽コーパス』による五つ年代のレベル分けに従い、筆者自身が判断して分類したものである。

【参考文献】

- 宮島達夫 (1977) 「語彙の体系」『岩波講座日本語 9 語彙・意味』岩波書店
- 樺島忠夫 (1981) 『日本語はどう変わるか—語彙と文字—』岩波新書
- 池上禎造 (1984) 『漢語研究の構想』岩波書店
- 森岡健二 (1991) 『近代語の成立 文体編』明治書院
- 宮島達夫 (1994) 「第3部第1章 単語の文体的特徴」「第3部第2章 動詞の意味と文体的性質」『語彙論研究』むぎ書房
- 樺島忠夫 (2004) 『日本語探検—過去から未来へ—』角川書店
- 高野繁男 (2004) 『百科全書』の訳語、『近代漢語の研究——日本語の造語法・訳語法』明治書院
- 田中牧郎 (2011) 「近代漢語の定着—『太陽コーパス』に見る—」『文学 特集：言語資源としての日本語 12-03』pp.136-153 岩波書店
- 金 愛蘭 (2011) 「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究別冊三』
- 金 愛蘭 (2012) 「外来語の基本語化」『外来語研究の新展開』おうふう pp.29-45
- 田中牧郎 (2012) 「新漢語定着の語彙的基盤—『太陽コーパス』の「実現」「表現」「出現」と「あらかず」「あられる」など—」『日本語の学習と研究』160
- 金 愛蘭 (2013) 「外来語動名詞「チェック」の基本語化—通時的新聞コーパス調査と意識調査の結果から—」『現代日本語の動態研究』おうふう
- 田中牧郎 (2013) 『「明六雑誌コーパス」『太陽コーパス』から見る近代語彙』『国語研プロジェクトレビュー』国立国語研究所
- 田中牧郎 (2013) 『近代書き言葉はこうしてできた』(そうだったんだ！日本語) 岩波書店
- 浅野敏彦 (2014) 「Ⅲ漢語の相関と革新」『国語史のなかの漢語』和泉書院
- 今野眞二 (2014) 『日本語の近代—はずされた漢語』ちくま新書
- 田中牧郎 (2014) 「コーパス活用の勘所—第1回【日本語史】近代語の語彙(1)：『太陽コーパス』による新しい漢語の研究—」『日本語学 特集：命令表現 33-4』明治書院

- 田中牧郎 (2015a) 「近代新漢語の基本語化における既存語との関係—雑誌コーパスによる「拡大」「援助」の事例研究—」『日本語の研究 11-02』日本語学会 pp.68-85
- 田中牧郎 (2015b) 「明治後期から大正期に基本語化する語彙」『日本語語彙へのアプローチ—形態・統語・計量・歴史・対照—』おうふう

【データベース】

- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (略称 BCCWJ)』
- 『日本語歴史コーパス』 (略称 CHJ)

【辞書類と資料】

- | | | | | |
|---------------------|---------|---|--------|------|
| 『日本国語大辞典第二版』 | 北原保雄 | 他 | 小学館 | 2003 |
| 『岩波古語辞典 補訂版』 | 大野晋 | 他 | 岩波書店 | 1990 |
| 『小学校古語大辞典』 | 中田祝夫 | 他 | 小学館 | 1993 |
| 『角川古語大辞典』 | 中村幸彦 | 他 | 角川書店 | 1999 |
| 『古典基礎語辞典』 | 大野晋 | 他 | 角川学芸出版 | 2011 |
| 『明治のことば辞典』 | 惣郷正明 | 他 | 東京堂出版 | 1986 |
| 『大漢和辞典』 | 諸橋轍次 | 他 | 大修館書店 | 2000 |
| 『近代漢語研究文献目録』 | 李漢燮 | 他 | 東京堂出版 | 2010 |
| 『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』 | 佐藤亨 | 他 | 明治書院 | 2007 |
| 『語彙研究文献語別目録』 | 佐藤喜代治 | 他 | 明治書院 | 1983 |
| 『分類語彙表 増補改訂版』 | 国立国語研究所 | | 大日本図書 | 2004 |

(ちょう・あいか 博士前期課程)